

第1回

(仮称) 第2期札幌市教育振興基本計画の策定に
向けた令和4年度検討会議

議 事 録

日時：令和4年7月11日（月）16時00分～18時00分

場所：S T V北2条ビル4階 教育委員会会議室

1 開会

○事務局（教育政策担当課長） 定刻となりましたので、これより「第1回（仮称）第2期札幌市教育振興基本計画の策定に向けた令和4年度検討会議」を開催したいと思います。

本日は皆様ご多忙の中、御出席いただきまして誠にありがとうございます。

私は、本会議の進行を務めます、札幌市教育委員会教育政策担当課長の水野でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日の会議の終了時刻は18時を予定してございます。御協力のほど、よろしくお願いいたします。

ここから着席して進めさせていただきます。

2 教育長挨拶

○事務局（教育政策担当課長） それでは、次第に沿って進めさせていただきます。

まず、検討会議の開会に当たりまして、本市の教育長の檜田より御挨拶を申し上げます。

檜田教育長、よろしくお願いいたします。

○檜田教育長 皆様、改めましてこんにちは。教育長の檜田と申します。いま水野の方からございましたけれども、仮称ではございますが、第2期の教育振興基本計画の今年度の検討会議ということで、まずはこのお忙しいなか皆様に委員をお引き受けいただき、また今日もこのように会議に御参加いただき、改めて御礼を申し上げます。どうもありがとうございます。

少し経緯をお話しさせていただきますと、平成26年に今の教育振興基本計画を策定いたしました。それからちょうどあと2年ほどで10年を迎えます。私は教育委員会に平成24年から籍をおいておりまして、そのときに、当時のこれからの10年を見越した札幌市の教育をどうしていこうかという計画を策定しており、そして平成26年から全面実施をさせていただき、途中、前期アクションプラン、後期アクションプランということで平成31年に改定をし、そしていま現在進めているという状況であります。

改めて令和6年度からの新しい計画ですが、現行の計画と比べても、日々教育に係る課題や、子どもの学びの状況や、コロナのことももちろんそうですし、一人一台端末が子ども達の学習のツールとして急速に広がるということも、10年前には想像ができな

った状況もございます。加えて、子ども達の不登校やいじめなど、長く課題になっていた問題も、非常に深刻化・複雑化しているという状況もございます。

こうしたなかで、札幌市の第2期の計画をどのような方向で作っていったら良いかという検討をぜひ委員の皆様から忌憚のない御意見をいただき、あるいは事務局のほうで原案など準備させていただくものなかで、もっとこういうところを加えたら良いのではないか、あるいはこういう表現ではなくてこんなふうにと、それぞれの立場から御意見を頂戴し、それを生かした形で、私達も子ども達一人一人の豊かな学び、そしてできることであれば生涯に渡る札幌市民全員に係る学びの充実にも繋げていくような計画を策定したいと思っております。

ぜひお力をお貸しいただいて、今日から会議を何回か開かせていただきますけれども、どうぞよろしく願いいたします。

3 委員自己紹介

○事務局（教育政策担当課長） 続きまして、本日が初回でございますので、委員の皆様にご自己紹介をお願いしたいと存じます。

恐れ入りますが、戸田委員から時計回りで、簡単で結構でございますので、自己紹介をお願いいたします。

○戸田委員 北海道教育大学の戸田でございます。どうぞよろしく願いいたします。

○瀧澤委員 北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科の瀧澤と申します。どうぞよろしく願いいたします。

○和田委員 札幌大谷大学社会学部地域社会学科で教員をしております和田でございます。どうぞよろしく願いいたします。

○壽原委員 札幌市PTA協議会で副会長をしております壽原と申します。よろしく願いいたします。

○事務局（教育政策担当課長） ありがとうございます。以上4名が令和4年度の委員となっております。どうぞよろしく願いいたします。

4 事務局自己紹介

○事務局（教育政策担当課長） 続きまして、教育委員会の事務局職員についても御紹介させていただきます。教育次長の竹村でございます。

＜竹村次長以下、自己紹介省略＞

○事務局（教育政策担当課長） ここで、檜田教育長と竹村教育次長は、他の公務のため退席させていただきます。

○事務局（教育長・教育次長） よろしくお願いいたします。

（檜田教育長及び竹村教育次長退席）

5 議事

○事務局（教育政策担当課長） それでは、これから議事に移ります。次第の方を御覧ください。議題1「(仮称)第2期札幌市教育振興基本計画の策定に向けた令和4年度検討会議の開催日程等について」について事務局から説明をお願いいたします。

＜資料3に基づき、開催日程等について事務局（手塚教育政策担当係長）から説明＞

○事務局（教育政策担当課長） ただいまの説明について、御質問等はございませんでしょうか。

（発言する者なし）

それでは、開催日程等については、このとおり進めたいと思います。

続きまして、議題2「札幌市教育振興基本計画の概要と振り返りについて」事務局から説明をお願いします。

＜資料4、5、6に基づき、札幌市教育振興基本計画の概要と振り返りについて事務局（手塚教育政策担当係長）から説明＞

○事務局（教育政策担当課長） 長時間となりましたが、現在の計画において札幌市が取り組んできた成果と課題について、学校教育に関するものを御説明させていただきました。

特に資料のなかで「新たな課題」として記載した部分につきましては、我々教育委員会で認識しているものでございますので、委員の皆様からみた「課題」など、我々の気づきとなるような御意見をいただくと非常にありがたいと考えております。

それでは、学校教育の振り返りの部分につきまして御意見をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

それではこちらからお願いしたいのですが、戸田委員には現在の教育振興基本計画の進行管理を行っている「教育委員会事務点検・評価」の報告書に学識経験者として御意見をいただいておりますが、改めて学校教育について振り返りまして、課題等ございま

したら御意見をいただければと存じます。

○戸田委員 色々これまで拝見してきたところもありますし、なるほどと思うところもあるのですが、毎年札幌市は頑張っているなと思いながら報告を見させていただきました。

資料4の1ページ、2ページあたりの子どもの自己肯定感については、いろいろなさっているけれども、なかなか数字には表れないというところがどうなのかなと思っていました。ただこういうものって、子ども本人にアンケートで聞いておりますので、ある程度割り引いて考えていかないとならない部分かなと思います。特に外国と比べて日本の子どもは非常に自己肯定感が低いと言われて、確かに数字だけみるとその通りなのですが、日本人特有の謙遜とか、あるいは出る杭にならないように、自分があんまり良いつて言わないようにしようというところが多分にあります。中学生は特にそういうところが大きいと思いますので、数値だけを目標にするのではなくて、数値以外の何か指標みたいなものも、今パッと言えないですけれども、そういったことを考えられてもいいのかなと思っておりました。

数値で見た方が良いのは3ページの体とか運動のところかと思うのです。ここはもうはっきり出ていまして、札幌市はあまりよろしくないですね。これはいろいろな原因があるかと思うのですが、特に今回はコロナで一緒に遊べないとか、そういったことがこの先もまだ悪い影響として数年間残るのではないかなと思っておられますので、ここもがっかりせずに一生懸命取り組んでいただければ良いのではないかなと思います。

読書については、あまり一般論ではないのですが、教育大札幌校の学生160人ぐらいに聞いてみたら、大学生になって本を読んでいるかどうかと、小中学校の時に本を読んだかどうかはあまり関係がなかったのです。みんな中学校、高校になると、どんどん本を読まなくなっていて、それはなぜかという部活が忙しいからなのですね。大学になると勉強しなきゃいけないから仕方なく本を読むのですが、やはり本が好きになるかどうかというのは、朝読書がすごく良い影響を持っていると思うのですが、もう一歩何か踏み込めると良いなと思っておられます。特にアイデアがあるわけではありません。

あと教員の皆さんに良い研修とか、教員養成の大学なので現場と繋がりもかなり密なのですが、やはり皆さん非常にお忙しくて、明日の授業の準備で精一杯というところがありますので、なんとか研修の機会をうまく作ってあげるとか、そういった工夫

を札幌市の方でもう一步踏み込んでやっていくと良いのではないかなと常々思っております。

○事務局（教育政策担当課長） ありがとうございます、4点お話いただきました。

まず自己肯定感は割と謙遜があるということでございますけれども、ただ明らかに体力や運動については良くないですとか、職員の研修の機会の確保等は時間を工夫してやっていくべきということで御意見をいただきました。

今の件に関して、また新たな他のテーマでも、御意見がありましたらお伺いしたいと思います。

○瀧澤委員 北翔大学の瀧澤です。私のキャリアから言いますと、札幌市の学校教育現場に所属し学校現場に17年間いて、今は大学の教職課程を担当し研究者の仕事も始めて、札幌市の中にいて、それから今は外にいて見られる状態であります。中にいたときは中にいた時で、様々な課題を抱えている事を知りながら仕事をしてきましたし、外に出るといろいろ今まで見えてこなかったものが見えて、かつて同僚だった先生達が今どういう状態であるかということも認識しているので、そういう観点から今回参加させていただいて、いろいろと提言というか情報提供させていただき、お役に立てればという思いで来ています。

先ほど戸田先生が自己肯定感のことについておっしゃったのですけれども、自己肯定感って何なのかという認識を持っている現場の教員がどれだけいるのかなということが、そもそも論としてあります。自己肯定感について市場で出回っている書籍もいろいろな形やタイトルで売られていますし、私は特別支援教育が専門なので、特別支援教育の世界でも自己肯定感の重要性というのはすごくうたわれて強調されるようになってきた時代で、私が現場にいた時とは全然違うぐらい自己肯定感についてはいろいろな人が言い始めています。ネットは最たるもので、ですけど逆に遠くから見ると、自己肯定感という定義が人それぞれであるという現状も出始めていて、一体自己肯定感って何なんのかなという、明確な位置づけが少し混乱しているように見受けられるので、尚更、現場の先生は自己肯定感をどうやって捉えているのかがすごく気になりました。それによって子どもの見方が変わってきますので、そこについては市教委がしっかりとした定義を提示したうえで、自己肯定感というものを提案しておかないと、非常に混乱し、いろいろな人がいろいろな自己肯定感を言い始め、極端な表現をする人もいますので、危険だなという感じがしています。とても評価されやすい、肯定的にとらえやすい言葉である

がゆえに、すごく出回りやすい、流行しやすい言葉でもあり、そして必ず国際比較される。ですが戸田先生の御指摘にもあったように、日本人独特の感性とか文化、そういう背景の元での自己肯定感ということも考えていかないと、自己肯定感だけ一人歩きして、それが現場を混乱させているような感じになりますので、しっかりと定義づけをしたうえで自己肯定感という言葉の使い方をしてほしいなと思いました。

ほか、新たな課題の中で感じたことの1つに充実という言葉がいろいろ出ているのですが、どうやって充実させていくのかという具体性が見えてこない。充実という言葉はすごく使いやすい言葉ですし、便利な言葉ではあるのですが、では具体的にどうやって充実させるか、人によって充実もまた違うと思うのですね。その捉え方が様々ですから、充実という言葉にもしっかりと定義づけが必要じゃないかなというふうに思います。人によってどこまでを充実とするか一人一人のイメージで違いますので、しっかりと組織化されて機能したら充実と言うのか、機能しなくても形だけ整えれば充実というふうに言うのかなど、意味合いが曖昧な言葉づかいが全般的にあったので、それが少し気になったところです。

○事務局（教育政策担当課長） ありがとうございます。自己肯定感、それから充実という言葉の意味や使い方に関する御意見だったと思います。

今は振り返りの段階ですけれども、これから計画を策定するにあたっては、しっかり認識していかなければと思います。

○和田委員 札幌大谷大学、和田でございます。私はかつて社会教育委員を務めていまして、昨年度は事務点検・評価などでお世話になりました。私自身が札幌生まれ札幌育ちですけど、札幌市は自慢できる街で、教育の取組も、本当に充実した都市だと思っております。本当に良くやっという感じがするなと思っております。

例えば、私は社会教育委員だった時、サッポロサタデースクールの黎明期だったので、3校ぐらいから始まったものが、いまはもういろいろな人を巻き込んで、先生たちと、地域の人と、みんな一緒にという、まさに社会教育が狙っていたスタイルが形になっていくのを横から見ていて、とても素晴らしいな感じています。それから多様化ということが流行り言葉みたいに言われていますけれども、子ども達は様々な背景を持っていますから、追いついていけないぐらいの変化を感じている中で、そういったことに対する目配りもここ数年間随分と力を入れていたのだなと感じました。

ただ、本当にいま申し上げたとおり変化が激しいので、コロナ禍ということもあって、

自分の目の前の学生達を見ていても、理解してあげたいけれども理解できないような状況が日々起こっていたり、私達大人が思う感覚と、子どもの目線から見たものがどんどんずれていくのだらうなと思いますので、そこは当たり前のことですけれども、目配りというか、その間をつなぐようなことが必要なのかなと思います。これまでの当たり前が当たり前でなくなってきた、何が当たり前か本当にわからなくなっている時代だと思うので、そのあたりのことを踏まえながら、今まで大事に育ててきたものを大切に、また、時代によって新しい視点を取り入れなければいけないことを感じています。

それから、国際都市ということで、札幌を特徴づけるために英語教育にもずいぶん力が入っていることがわかりました。外部人材の活用というのも出てきましたけれども、ちょっと思い切ってDXとかITとかもそうですけれども、外部人材などを上手に活用して、教育の発展に生かしていけたらいいのかなと思っていました。内部の人間だけでやるには本当に限界があると思うので。

それから読書に関してですが、ちょうど今日午前中にゼミの学生達を本屋さんに連れて行ってきました。ブックハントで好きな本を買わせるプログラムもゼミの中に入れているのですが、そうすると、1年に1冊の本も読まないような大学生が本屋さんに放すと目をキラキラさせるのですよね。何でも好きな本を選んで良いとなると、大事そうに本を抱えてきます。そういうちょっとした仕掛けのようなものがあると、クリスマスプレゼントみたいだと言っていた子もいますが、主体的な学びに繋がったりしますので、そういった工夫も必要なのかなと思っています。

○事務局（教育政策担当課長） ありがとうございます。新たな視点が重要ということ、外部人材の活用、それからブックハントは私初めて聞きましたけど、読書については、大学生でもいろいろ仕掛けていかなければならないことなど、非常に参考になりました。ありがとうございます。

壽原委員は実際にお子さんが学校に通われているという立場で、御意見をいただければと思います。よろしくをお願いします。

○壽原委員 教育に関しては素人なので、子どもの姿を見ていて感じることや、学校の先生を見ていて感じることなど感想でしかないと思うのですが、先ほど自己肯定感について皆さんおっしゃっていますが、私も本当にそれをすごく感じていて、多分コロナで学校に行けなくなったり、いろいろな行事がなくなったことによって、活躍できる場がなくなり、例えば予期せぬ役が与えられてもそれが成功すると自分ってすごいと

思える、そういう活躍の場がなくなったことが、数値的にコロナの影響をすごく感じます。ただ、コロナの状況が少しずつ落ち着いてきて、今年はわりと合唱コンクールや学校祭などの行事も少しずつやれるように学校の先生達もいろいろ考えてくださっているので、それに関わっている子ども達を見ると、やっぱりキラキラしているので、状況を踏まえながらやる方向で学校に頑張っていたきたいというのが実感としてあります。

私は札幌市PTA協議会で札幌市文教施策の要望書に2年間関わらせていただいたのですが、先生の負担を心配される保護者の声がたくさん多く、仕事が多すぎるのではないかという要望もたくさんあります。実際PTA事務局として学校に行き先生たちを見てもそれはすごく感じます。今、学校への電話が転送電話に切り替わる時間がだいぶ早くなってきたりして、先生達にとってはすごく良いことだと思うのですが、転送になった時に保護者が不満に思う事も多いので、そこをうまくやっていると良いなと思います。

また、読書に関しては朝読書を学校でやっているのですが、それがただやるだけになっていないかということが少し気になります。私の子も中学2年生ですが、朝読書の本を一冊持って来なさいと言われても、多分同じ本しか持って行かないのですよね。司書さんを入れていただいて、すごく充実していると思うのですが、図書館に行くこともなかなかしないようで。学校では、できるだけ活字を読みなさいという指導をしているのだと思うのですが、そこを漫画でもいいから読んでみようよとなっていくと、小さい子の取っ掛かりとして良いのかなと思っています。ただ、子どもの国語力が乏しいので、読書が大事なのだろうなどは日々思っております。

雪に関しては毎年要望書に出てくるのですが、スキーリサイクルを行っていても、リサイクルの数が足りないという声があります。コロナになってからもバスを増便していただいてスキー場に行けてはいるのですが、結局山に行けるのが年1~2回しかないのに、小学生は2年ごとに買い替えなければいけないぐらいの成長があるのに、何万円もかけて用意するというのは、家族揃ってスキーに行く家庭は気にならないけど、そういう家庭ばかりとは限らないので、負担を軽減する方法があると良いかなと思います。スケートなどもあり、冬の体育の授業はスキーに限定してはいないと教育委員会はおっしゃっているのですが、なかなか保護者の意見と合わないなということが実感としてあります。ただ、少し動いているだけでも全身運動になるので、スキーは運動量としてはすごく良いと思います。

あとは地域との連携と最近よくうたわれているのだけど、その地域というのはどういうものなのだろうと疑問に思っています。例えば近隣の町内会から、運動会の音がうるさい、埃がすごい、ということを言われている状況で、地域からの協力を果たして得られるのか、学校の参観も地域によっては保護者が忙しくて子ども達を見に来られない、そういう中で協力を得られるのかなということが、漠然とした意見で申し訳ないのですが感じます。サタデースクールも私の周りではあまり聞かないので、地域によるのかなとも思いますし、コロナだからなのかもしれないですが、学校と保護者の距離が少し開いているような感覚があるので、それを保護者と地域と一緒にというように持っていけるのかなと感じております。

○事務局（教育政策担当課長） ありがとうございます。自己肯定感のために子どもの活躍できるような場所が重要だと思ったということ、先生の負担の心配、朝読書やスキー学習についての効果、地域との連携について、コロナということで地域との距離が離れてしまったことについて御意見をいただきました。

○壽原委員 追加しても良いですか。不登校が増えていることについてですが、学校に行けなくなってしまう子ども達のうち、何が嫌という理由がないという子が最近すごく多いです。学校には行こうとするけど朝になると行けないとか、友達も好きだけど学校には行けないとか、学校の教室に入るのが難しいとか、いろいろなパターンがあって、何が嫌というのがわからない子が増えているような気がするのですよね。そこを専門の先生とかから御意見をいただいて、学校にあまりに無理に行かなくても良いという世間的な風潮もありますけど、やっぱりコミュニケーション力とかは、やはり会ってなんぼだと思うのですよね。ゲームで繋がって声だけ聞いている友達、学級閉鎖になっていてもそうやって遊んでいたから話せてはいるというけれども、実際に気持ちを汲み取るのは対面じゃないとできないのではないかと思います。不登校の子は何かとしてあげたいなということは思います。学校によっては1クラスに何人も不登校の子がいるということも聞いて、すごく増えているなど感じるのです。

○事務局（教育政策担当課長） ありがとうございます。多分現場の先生もそれを非常に実感していて、私共も認識しているところでございます。これについては、振り返りの中でも認識してございますけれども、新しい取組としても入れていかないといけないと考えてございます。

まだまだ御意見もあるかと思いますが、時間の都合もありますので、一旦ここで学校

教育に関する振り返りは終了し、休憩を挟むこととし、後半は生涯学習についての振り返りに入りたいと思います。

休憩は、今から5分間としまして、17時20分から議事を再開したいと思います。よろしくをお願いします。

(休憩)

○事務局（教育政策担当課長） それでは、議事を再開します。後半は、生涯学習に関する振り返りについて御説明させていただき、また先ほどと同じように闊達な御意見をいただければと思います。

では事務局から説明をお願いします。

<資料4に基づき、札幌市教育振興基本計画の振り返りについて事務局（手塚教育政策担当係長）から説明>

○事務局（教育政策担当課長） 生涯学習について皆さまから御意見をいただければと思います。読書の話も出てきておりますけれども、どちらのテーマでも結構でございます。よろしくお願いたします。

○和田委員 先ほどのサタデースクールの話で、コロナ禍によって縮小してしまったのか、それとも地域と学校とが連携していくことが困難という理由なのか、学校の先生たちの負担が多いという声が多いのか、そのあたり具体的にはどうなのかなと気になりました。高齢社会でもありますし、力を使える人が地域のために力を使っていくような仕組みがうまく回り、1つのシステムになり得るものだと思っておりますけれども、人が変わると変わってしまうものなのか、そのところがちょっと気になりました。

○事務局（教育政策担当課長） ありがとうございます。サタデースクールとコミュニティスクールはいろいろ関連があり重要なところですよ。

○和田委員 はい、発展的になっていけば良いと思うのですけど。

○事務局（教育政策担当課長） ありがとうございます。そのあたりも振り返りを踏まえて充実させてまいりたいと考えています。

サタデースクールの話でも他のテーマでも結構でございます。他の方はいかがでしょうか

○戸田委員 どのテーマというわけではなく全体としてなんですけれども、人生100年

時代という言葉があちこちに出てきますが、100歳で元気に活躍される方が何%いるかということなのですよね。私も親が高齢でいろいろ大変なので身近なのですけれども、年上の方たちが体を悪くされたり寝たきりになったりすれば、人手がものすごくかかるわけです。1人寝たきりだと大体4人ぐらいフルタイムでないとだめなのですよね。4人じゃ足りないと思いますけれども。そうすると、生涯学習についてせっかくいろいろなアイデアとか企画をしても、100歳の人も来られない、その方を介護している人も忙しくて来られない。子育てのレベルでないぐらいやっぱり大変なのですよね、子どもと違って将来の希望があまり持てないので。ですから、札幌市民が生涯学習をするにあたって、今後は健康づくりみたいなことをもっと若い世代から、若いうちから寝たきりにならないような、60代・70代になってからじゃなくて、現役世代の30代・40代から健康に気をつけるようなことを生涯学習に盛り込んでいけないかなと素人考えですけれども思っております。そうでないと、参加する人もご近所先生もみんな人数が減ってきてしまいますので、これから高齢化で、そういうことをちょっと考えます。

○事務局(教育政策担当課長) ありがとうございます。体力とか健康とか食生活とか、学校教育も大いに関係するところだと思います。人生100年につきましては、今の中学生ぐらいから100歳まで生きるというふうに言われていますけど、若い時からそういった取り組みが大事ということでございます。

他にございますか、御意見等いただければと思います。

○瀧澤委員 全般的には札幌市の生涯学習、私は専門ではないですけど、家内がちえりあをよく利用したり、ご近所先生をやって生き生きしているのを見たりして、あのようなプログラムは札幌市独自のものでしょうし、すごく機能しているなというふうに傍目で見えています。札幌市民195万人以上もいる中で、生涯学習という位置づけについては機能している面が多々あるなど、身近に感じていたところでした。

ですけれど、私の専門の特別支援教育という観点から言うと、知的障がいのある成人の方が、生涯学習の中にどう位置付けられているのかが全然見えてこないのは、今後の課題として検討をそろそろ開始していただいても良いのではないかなというふうには思います。他の行政機関を見ていると、知的障がいの成人の方々の大学などについて、アメリカからのものを日本に取り入れ、確か横浜などでやり始めていますので、そういう知的障がいのある成人の方々の生涯学習というものについても、札幌市もいろいろと検討していただければ。彼らは福祉サイドで生活していることがほとんどですから、実態と

しては福祉施設で生涯を送ることになる人がほとんどです。ですが、施設にとどまらないで、地域で生を全うして欲しいと一研究者として思いますので、地域に開かれた中に彼らの存在もぜひとも生涯学習の中に位置付けて、彼らがどう生涯学習の中で豊かな暮らしをしていけるのかということをご検討して欲しいとは思いました。

○事務局（教育政策担当課長） 大変参考になる御意見をありがとうございます。障がい者の視点、障がいのある方に対しての開かれた生涯学習ということで御意見をいただきました。

○事務局長（生涯学習部長） 今、先生からお話がありましたけれども、札幌市の教育委員会で知的障がい者の方を対象とした社会教育事業をやっているのですが、先生のおっしゃられたような形ではなくて、知的障がい者のための成人学級という事業で、1つは高等支援学校の卒業生の主に保護者の方の団体に対しての支援、委託料を出している活動をしていただいていることが1つ。あともう1つは、知的障がい者の団体に対しても同様に活動いただいています。ただし、先生のおっしゃる通りに体系づけてやっているというよりも、団体とか卒業生とかでしかやっていないのは事実でして、団体からもいわゆる福祉政策ではなくて、教育政策としてやってほしいというニーズはあるのですけれども、実際どういう形であるかということまで踏み込んで考えることはなかなかなく、これまでやっていることを続けてきたというのが現状でございます。

○事務局（教育政策担当課長） ありがとうございます。今の件も含めて、あと御意見があればよろしいですか。

○壽原委員 私がお話しできるのは家庭教育学級かなと思います。子どもが卒業した小学校の家庭教育学級をやらせていただいているのですが、働いている方が増えてきて、年々学級数を確保するのが難しくなっています。やっていてすごく楽しいですし、みんな楽しそうにされていて、例えば食育に関して勉強して作って、という活動を広めたいのですが、昼間に学校でやっていることなので、なかなか出向くことが難しい方が増えていく中で、存続が難しくなっていく学級が多いのではないかとというのは率直な感想です。でも、広めたいなという気持ちはすごくあります。ただ、代表を引き受けてくれる方が決まらないという、PTAのなり手がいない状況と同じで、ちょっと時間的に難しいって言う方も多いのかなと思います。あとそういう方は、休日は子どもと過ごしたいと思うので、なかなかオンラインで勉強するというところまで果たしていくのかなと思います。家庭教育って、大人の教育がすごく必要だと思っているのですが、その勉強

する時間をどう作っていくかということかなとは思いますが。大人一人一人が自分で作っていかなければいけないのだろうなとは思いますが。

○事務局（教育政策担当係長） ありがとうございます。今まで各委員の先生からサタデースクールに関する取組ですとか、人生100年というけれど実際健康でいられることはなかなか難しいという話、それから成人の障がい者に対する生涯学習について、そして家庭教育については大人が家庭教育を学ぶには時間確保が難しいというお話をいただきました。

今、4つのテーマで御意見が出ていますけれども、他のテーマでございましたら続けて御意見をお願いしたいと思えます。生涯学習に関しては学校教育と比べるとボリュームが少なく、学校教育と非常に重なる部分もございます。読書については先ほど学校教育に関して御意見をいただいたのですが、図書館についてはこちらの生涯学習の資料に記載しております。

（発言する者なし）

それでは、ここまで学校教育と生涯学習、大きく2つについて御意見をいただきました。ありがとうございました。最後にもう1つ、少し大きい視点で、現在の教育ビジョンについての御意見を頂戴できればと考えております。

改めてもう一度、資料5の3ページを御覧ください。概要が大きな字で書いてありますけれども、札幌市の教育が目指す人間像として、自立した札幌人を掲げております。これについては、次の計画でも継続して取り組んでいきたいと考えているところですが、時間の経過や、委員のお話でございましたけれども、変化のスピードが非常に速い世の中の状況ということで、施策の基本的方向性についてはいろいろ見直しをし、新たなテーマを増やすといったことが求められていると考えております。

目指す人間像や方向性、新たに加える考え方やテーマがありましたら、御意見をいただければと考えておりますので、よろしくお願いたします。

学び、環境、地域や市民ぐるみの仕組み、サタデースクールなどもあると思えますけれども、新たな視点や、子ども達若しくは成人の方も、学校教育や生涯学習を通して、こんな人間が育てばいいなという思いも含め、広く御意見をいただければと思えます。

○瀧澤委員 自立と共生ですよね、キーワードは。共生の意味が、障がいの有無に関わらず、人として共に支え合って生活していきましょうというのがざっくりした説明ですが、その共生が、果たして人間だけでいいのかなというのは、ずっと思っています。

して。というのは熊です。野生との共生というものが概念としてないのかなということは、ちょっと前から思っていたのですが、去年、東区に熊が出て大騒ぎになったと思うのですが、いよいよ札幌市も熊と共存していかなければならない時代に入っているなと思いました。これだけ整備された都市であるにも関わらず、自然も実はかなり残っているところもあって、札幌市東区を徘徊した熊が撃たれるところが何度も映像で流れていましたけれど、排除する、駆除するだけでいいのかなというのは前から思っていたのです。共生というか共に生きるのであれば、やっぱり野生・自然との共生というのも必要だと思います。これだけ緑豊かな地である市、雪がたくさん降る市は世界的にめずらしく、これは札幌市民である私の1つの誇りでもあるのですけれども、ヨーロッパに人口100万人以上で雪が3mも積もるシティはないという話を聞いたことがあって、それだけ札幌ってすごいところなのだなというふうに感じます。これだけの雪と闘いながらも、普通に暮らしている、今年の雪だけはちょっとしんどい目にあっただので、あれはちょっと例外としても、そういう雪との戦いも毎年やっていることですし、自然っていうものが身近なはずなのですよね。なので、その自然との共生の意味をもう少し広げて、自然という概念も、やっぱり札幌市民として、熊をはじめ鹿もそうですし、きつねも普通に出るのですよね。私は西区に住んでいるのですが、街の中で昼間から普通にキツネが通るのですよ。昔から「キタキツネにえさをあげるな」なんて看板が掲げられていたりするので、やっぱり以前から出没しているのだなと思うのですが、いろいろな自然の要素が札幌の中にはたくさんあるので、それをしっかりと教育の中に入れて、共生の意味合いをさらに充実して行って、札幌人としてさらに誇れるようになってほしいという願いから、自然という概念をビジョンの中にも入れてもいいのかなと思った次第です。

○事務局(教育政策担当課長) ありがとうございます。まさに札幌の宝でございます、自然と動物と雪をぜひ、生涯学習や学校教育を通じてということだと思います。

他の委員の方も御意見ですとか、新しい社会、子ども達、市民の方の取組など、お話をお願いします。

○戸田委員 この3ページ4ページを拝見していて、新しく全部変えちゃうのかなと最初ちょっと誤解していました。せっかくこうやって設定された目指す人間像ですから、大事に持っていきたいなと思うのですけれども、主体的に行動する人って書いてあるのですけれども、能動的に自分から動くという意味がもうちょっと強くあってもいいのか

なと思います。例えば、基本的方向性の中に自ら学び共に生きる力を培うとありますけれども、自ら能動的に学ぶ、能動的に動くっていうことは、行政などで、こちらに行きますよとか、こうしますよと決めたことに対して反対する人も増えるということなのですよね。それも考慮した上で、それでもやっぱり一人一人がものを考えて行動するような札幌人であっていただきたいなと私は個人的に思っています。あとは、せっかく子ども達に雪・環境・読書というキャラクターを設定しているので、これはこのまま使わないにせよ、こういったことを生涯教育の中にも何らか生かしていただけると良いと思います。雪も多いし、環境・自然も豊かであるし、読書と決めちゃうよりは情報をうまく使うとか、そういったかたちで、子どもの時はこういう教育で大人になっても続いてるよ、という一貫性があるといいかなと思いました。

○事務局（教育政策担当課長） はい、ありがとうございます。能動的に学ぶ、行動するということと、雪・環境・読書について、子ども達だけでなく生涯学習にも生かしていくという御意見だったと思います。

○和田委員 このビジョンを作ったときに相当議論されたと聞いていますので、原則は大事にしていったほうが良いなと思いながら見ておりました。時代に合わせて細かい部分は変えないとならないのかもしれないですけど、大きくは変えようがないのかなというふうに思っています。

あと、ちょっとこの中に入るかどうかかわからないですけど、先ほどのお話にもありましたけれども、やっぱり不登校のことが気になります。生きやすさというか、誰もが生きやすい、というようなイメージの言葉がないかなと思っています。共生にそこが含まれるのですが、ちょっと気になりますよね。立ち上がるというニュアンスの言葉がないかなと思っていました。ちょっとうまく出てこなくてすみません。

○事務局（教育政策担当課長） ありがとうございます。共生、共に生きる力というのは、今はつまずいているかもしれないけども、この先まだ明るい未来が待っている、決して諦めないということ、ちゃんと言葉で伝える、伝わるような、そういうことかと思えます。

それでは壽原委員、最後でございませうけれどもお願いできますでしょうか。

○壽原委員 とにかく自分でちゃんと自立ですよね。自分の意見をちゃんと言えるとか、自分はどう生きていくかというのを、ちゃんと道があるよとか、そういう風に自分が思えるようになってほしいです。日本人はそういう部分が少ないかなというイメージが何

となくあって、授業でも手を挙げて目立ちたくないとかそういうところがあるので、まさに考えて能動的にということを目指していけたらと思います。

○事務局（教育政策担当課長） ありがとうございます。実際にお子さんがいらっしゃるといふ非常に重みのある御意見だと思っています。

ここまでいろいろと皆様に御意見を頂戴いたしました。本日の会議で頂いた御意見は、ぜひ次期計画において反映していきたいと考えております。

本日は予定の時間が近くなっていますので、一旦議事については、議題1、議題2とともに終了したいと思います。

6 事務連絡

○事務局（教育政策担当課長） 最後に、次回の検討会議について、事務局から連絡いたします。

○事務局（教育政策担当係長） 今回は、9月上旬を予定しておりますが、日時につきましては後日改めて委員のみなさまと調整させていただきたく存じます。なお、会場は本日と同じこちらの「教育委員会会議室」を予定しております。

議事は、議題1で申し上げましたとおり、「(仮称)第2期札幌市教育振興基本計画の方向性」について御説明させていただき、御意見を頂戴したいと考えております。また「成果指標の方向性」についても御意見を頂戴したいと思いますので、引き続きよろしくお願いたします。

7 閉会

○事務局（教育政策担当課長） それでは、これをもちまして第1回検討会議を閉会いたします。本日はありがとうございました。

以 上